

待降節第一主日

ルカ 21・25-28, 34-36

2018.12.01

高円寺教会 18:30 ミサ

クラレチアン宣教会 梅崎 うめざき たかいち 隆一神父

今日の福音の内容の背景には、具体的には66年から70年まで続いたユダヤ戦争という出来事があります。ローマの第10軍団がエルサレムを攻略。殺された住民は110万人、9万7千人が捕虜になったと記録されています。でも、実際に殺されたのは3万人ぐらいだったのではないかとされています。それでもものすごい数です。3万人の人が目の前で虐殺され、それが自分の良く知っている人であるのですから、その状況は天地が揺れ動くような様であったと表現しても大げさではありません。こういった大きな混乱があったら、大きな悪に小さいのちは飲み込まれてしまいます。

今までは戦争が起こるのは当たり前で、地震や台風がきたのと変わらないと理解していました。しかし天災の被害を最小限にし、戦争という人災は止められると考えることもできるようになった。今の時代は、一人ひとりの人間が尊厳ある者であり、人が起こす戦争によって死んで良い人など一人もいないと言える時代になったことは非常にありがたいことです。

哲学者のホブズは、戦争をなくすために戦争の原因を考えたらいいというふうに考え、最終的に行き着いた結論は、物を奪い合う人間同士が相互不信だと結論づけた。彼は戦争の原因がわかったら戦争を止められると考えた。それで考え出したのが憲法だといわれています。権利を持っている人間が権利を手放し、人間を超えるルールを作り、支配者を立てる。でもそうしてしまうと独裁国家になってしまう。そこで後にルソーという人が、憲法の上に国民を立て、ルールを守るのを権力者のほうにしました。

人権の尊厳を掲げる戦後の日本の憲法のおかげで、日本においては73年間戦争が止まった。こうして人間が戦争を止めることができました。これは日本のみならず世界の戦争を止めるものになればなりません。

これは父のみ旨とも非常に関係があります。「小さい者の一人が減びることは父のみ心ではない」と聖書に書かれています。父のみ心が実現することはキリスト教徒だけでなく、すべての人にとっても大きな喜びとなることがわかります。

しかしわたしたちは教会の中ではこのような話ができますが、日常生活に戻ると神のことば以外のいろんな声を聞くことになります。ある人は「戦争というのは軍事力によって止めることができるけど、それがなかったら無理だ」と言います。日常においてはこのような大きな声に神のことばがかき消されてしまいます。「小さい者の一人が救われることよりも、少しの犠牲があっても目的が達成することを善しとすべきではないか」などという声も聞こえます。

わたしたちは、父のみこころが世界の中に実現するということを本気で信じている小さな羊の集まりです。ですから、わたしたちはこの世の声ではなくて、神のことばによって養われなければ、生きていくことはできません。教会という囲いの外にも存在するすべての羊は、神なしに生きていけません。人はパンのみによって生きるのではなく、神のことばによって生きています。わたしたちは今日もミサの中で神のことばを聞き、そのことばによって養われています。救いはわたしたちの努力で手に入るものではなく、先に神様が弱い羊を見つけ、救うことによって実現します。

自分の力を超える滅びは、大きな力と共にやってきます。それはいつも戦争の形であるとは限りません。人から見たら小さく見える問題が、抱えている人にとっては命の危険を感じさせるものであったりします。人を滅ぼす悪が襲ってきても、悪の力をはるかに超える神の救いが必ずやって来ることを、心を鈍くせず目をさまして祈り求めることができますよう共に祈りましょう。